

ハレルヤ！今も生きて働かれておられる主の御名を心から賛美します。

日頃より神学校、神学生を覚えてお祈りのご支援をいただき大変感謝いたします。神さまの恵みの中で、私たち神学生は神学校にて献身者としての学びをそれぞれが進めております。私たちが触れる学びにはいわば学びの三本柱と言われる要素があり、それらが互いに経験として相互作用することによって一つの神学校の学びとなることを主張しております。すなわち、学校での学び、教会での学び、そして寮での学びであります。他の神学校では学校、教会での学びだけを主に取り上げることがよくありますが、西南学院大学神学部ではこの二つの学びに加え、寮での学びを大切にしてきました。主に仕えるために自分の全てを捧げ、全国から集まってきた献身者が一つの寮で仲間として共に生き、生活する空間が与えられていること。この空間は何十年も前から彼らがその仲間たちと切磋琢磨し、時には雑談や冗談を言い合いながら笑いでいっぱいに溢れていた場であり、また時には真剣に神学の語らう場として互いの思想を傾聴し合い、また本気で互いの信仰を語り合うことで葛藤し、また励まされる場であります。ああでもない、こうでもない、とまるで答えが見えるはずのない「ゴール」とやらを闇雲に探し続けようとする語らいにも、何かしらの意味と価値、そして福音の希望を見出すことによって、互いの思いが深まる場であるのです。だからこそ寮での共同生活は献身をより確立し、深めるための「学び」なのだと思うのです。

近年、私たち神学生の人数は年々、残念なことに徐々に減少しております。コロナ前の数年前を振り返ると当時は神学生が20人近く与えられており、その5年ほど前の『道』を見返してみると30人近くの神学生が一つの寮に住みながら学びに励んでいたのだと知ると、現在の神学生数を見たときになんとも寂しい感情が心にあるのは否めません。「数」が全てではないことはもちろんのことです。が、神学校での学びを考えると、もっと切り詰めて寮での学びを考えると、支え合い、助け合い、祈り合う仲間が増えることは、きっとこの先、献身の道へ進んだ先の教会や地域のためになるだけでなく、献身の道へ心許なく歩んでゆく一人の大きな力と励ましとなるでしょう。それに気づかせてくれるのは、数年の短い期間だとしても生活を共にした、寮での学びからなのだと思います。

どうか日本に多くの献身者が起こされ、必要とされている場所に遣わされていきますように、また日本の隅々まで主イエス・キリストの福音と祝福が広がっていきますように共に祈りしていただけると幸いです。私たち神学生も主からいただいた召命を信じ、召命に生きるものとして整えられていきますように祈りながらこれからも神学校での学びを深めていきたいと思っています。

主の素晴らしい平安が豊かにありますように。



目次

巻頭言 「学びと関係が築かれていく空間」	2024年度 学生会副会長 吉田 睿濫	1
----------------------	---------------------	---

教員からのメッセージ（学部長から五十音順）

名も知れぬ死者を悼むために ～「ほうせんか」の活動	才藤 千津子	4
「交わり」について考えた	金丸 英子	5
「御国の子ら」って誰？—2024年9月30日神学部チャペル説教	須藤 伊知郎	6
バプテストの現代的使命	濱野 道雄	8
キリストのからだなる教会の献身 ～協力伝道の縮図としての神学寮	日原 広志	9
Think Globally, Act Locally	黄 南徳	10
あなたと神の物語	藤方 玲衣	12
グローバルな視点から過去と現在を理解してみる	G.Rodriguez	13

特集記事

アジア青年平和学校（韓国、鐵原）参加報告	長尾 基詩	14
これからの神学部とこれからの教会・伝道所が、 共に祈りあう事を願って	濱野 道雄	16
他派神学生にとっての西南学院大学神学部	伊藤 健一	18

神学生紹介

<最終学年>

神学専攻科	奥田 悟	20
大学院博士前期2年	吉田 睿濫	21
神学部神学科4年	長尾 基詩	22

<在校生>

神学部選科1年	大野 学	23
神学部神学科3年	張 恩榮	24
神学部神学科3年	伊藤 健一	25

編集後記	26
------	----

名も知れぬ死者を悼むために ～「ほうせんか」の活動

2024年度 神学部長
神学部教授 才藤 千津子

私は、9月1日に放映された「NHK こころの時代～宗教・人生～」という番組に、ほんの短い間ですが映りました。今年は関東大震災（1923年）から101年目にあたります。関東大震災の時、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」などという流言飛語に煽られて多くの朝鮮の人々が虐殺されたことは有名です。「ほうせんか」という市民グループと共に、名も知れぬ犠牲者についての目撃証言を集めている西崎雅夫さん（64歳）の証言がこの番組の中心であり、私は、多くの人が殺害された墨田区荒川の旧四つ木橋付近でのフィールドワークに参加した1人でした。

「関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会 ほうせんか」は、40年以上にわたって、荒川河川敷でのジェノサイド被害者の調査を続けています。犠牲者についての記録があまりにも少なく、実際に何が起こったのかを知ることが困難だったため、市民たちの手で地域のお年寄りへの聞き書き作業が進められました。その結果は、『風よ 鳳仙花の歌をはこべ～関東大震災・朝鮮人虐殺・追悼のメモランダム 増補新版』（ころから、2021年）にまとめられています。この本には、無実の朝鮮の人々が、荒川沿いのあちらこちらで軍隊の機関銃による一斉射撃や民衆の竹槍や刀によって無惨に殺された様子が証言されています。そのあまりの生々しさに、この本を読んだ夜私はよく寝付けませんでした。

このようなジェノサイドがなぜ起こったのでしょうか。誰の責任でしょうか。さまざまな理由がありますが、前述の研修の講師であった在日大韓基督教会牧師の金性済先生は、この問題の根底にあるのは「日本の政治に一貫している無責任体制とそれを指摘することのタブー」だと分析されました。誰も責任を取らない、都合の悪いことには目を閉ざして「なかったことにする」体制です。

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも目を閉ざすことになる」という有名な言葉は、1985年、西ドイツ（当時）ヴァイツゼッカー大統領がドイツの無条件降伏の記念日に行った演説の一節です。自分たちの歴史を記憶し心に刻むことは、たとえ苦悩と痛みを伴うとしても、私たちの責任です。私が西崎さんらの活動に心打たれたのは、自分たちが生まれ育った地域において過去に何が起こったのかという事実を地道に調査して書き残し、それを自分たちの歴史としてどう受け止め、未来につなげて行くかということを考え、実践しておられるからです。このような働きは、私たちに真の自由と希望への道を拓くものだと考えるのです。

「交わり」について考えた

神学部教授 金丸 英子



『聖書教育』誌に寄稿した。その一部を紹介したい。

「バプテストという仕方、イエス・キリストの体なる教会を建てるには？」。バプテスト史の授業で質問する。(中略) 牧師がいて、運営組織が備わっているからそれを「教会」とは呼べない。バプテストの先達には、教会の交わりに復活の主が見出せるか、そこに神の義が貫かれているかが要だった。

コロナウィルス感染の恐怖は、オンライン・テクノロジーによる時と空間を超えた交わりを可能にした。教会にも礼拝をはじめとする諸集会や教会総会への出席、研修会参加の道がひらけた。オンラインはビジネスの効率化には秀でても、目の前の人の温もりや息吹を伝える「対面」の交わりを深めるには限界がある。そこで、教会の交わりについて考えた。もし私たちが、オンラインによる礼拝や話し合いに左程不足を感じていないとすれば、私たちの教会の交わりは、そもそもどのような質のものだったのだろう。

原稿の構想を練りながら考えたのは、バプテストの先達が教会のあるべき姿を考えた時、「衝突や葛藤がなく事柄がスムーズに進む」ことを第一にはしなかったのではないかということだ。むしろ、「教会の交わりに復活の主が見出せるか、そこに神の義が貫かれているか」がより大切だったはずである。理由は、自ら教会と称していても、その体を成してない「教会」を目の当たりにしており、迫害覚悟で既成教会から出て、新しい信仰者の群れを始めたからである。あたかも『教会』と名前が付いているから、それが真の意味で『教会』である保証がない」とでも言っているかのようなのである。

キリスト教の歴史には、信仰者の交わりに関する古典がいくつもある。その中にボンヘッファーの『共に生きる生活』も含まれる。それによると、キリスト者の交わりとは、「恵みとしての、イエス・キリストを通しての、イエス・キリストにある交わり」のことで、努力目標としての「理想」ではなく、恵みの内にすでに届けられている「神的で霊的な現実」とある。私たちはこの交わりにあって、自らの悔い改め、使命への献身、他者への愛と関心、同労の友への信頼、労い、感謝、祈りへと導かれる。

最近、「仲間」という表現が気になり始めた。キリスト者は「キリストに従う者」の意で、「自分(達)に従うか否か、自分(達)の仲間か否か」が態度決定の要因とはならない。そこで、恵みの御手にひかれながら、「自分(達)とは誰か」を問う力量が必要となる。「キリストに従う」のであれば、「仲間でない者」の存在を疎んじ、立場の論理でその人たちの声を無きものにするなどの画策は有り得ない。それは「イエス・キリストの体なる教会」からは遠い。「教会」と名前がついていても、である。

「御国の子ら」って誰？

—2024年9月30日神学部チャペル説教

神学部教授 須藤 伊知郎



「言っておくが、東から西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に宴会の席に着く。しかし、御国の子らは、外の暗闇に放り出され、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

(マタイ福音書8:11-12、聖書協会共同訳)



ヴェロネーゼ「イエスと百人隊長」
プラド美術館

VERONÉS, PAOLO, Jesús y el centurión © Museo Nacional del Prado,
<https://www.museodelprado.es/coleccion/obra-de-arte/jesus-y-el-centurion/b5be4149-9cb8-4f12-91a9-585694f63b6e>, Zugriff vom 8.10.2024

カファルナウムの百人隊長は、おそらくイエスが病人を癒したという話を聞いて息子を癒してくれるのはこの人しかないと思ったが、ユダヤ人であるイエスを、汚れた者と見なされていた異邦人である自分の家に迎えることはできないと考え、「ただ、お言葉をください。そうすれば、私の子は癒やされます。」と懇願した（マタ8:5）。この百人隊長にはイエスに対する絶対的な信頼がある。「するとこれを聞いたイエスは驚嘆し、そして従っている者たちに言った、『アーメン、我汝らに告ぐ、誰のところにもこれほどの信をイスラエルの中に私は見出したことがない。』」（10節、須藤試訳）この後、冒頭に掲げたイエスの言葉が続いている。

「外の暗闇に放り出され」る「御国の子ら」とは誰のことだろうか？ヘブライ語聖書には、終わりの時に世界中から諸民族がエルサレムに貢物を携えて巡礼するという待望が記されているので（詩編72:10-11、96:7-9、イザヤ書2:2-4//ミカ書4:1-3、イザヤ書56:4-7、60:1-16他）、11節は異邦人が終末時のメシアの宴に参加することを指しており、12節の「御国の子ら」＝イスラエルはそこから排除されることが語られているのだ、というのがキリスト教会で伝統的に取られてきた解釈である。しかしこの解釈は誤っている。ぶどう園の悪い労働者たちの譬の後に福音書記者マタイが書き加えた解釈句である21:43には「このゆえに、我汝らに告ぐ、あなた方から神の王国は取り上げられ、そしてその実をなすならばどの民族にも与えられるだろう」（試訳）とある。

文脈からこの神の王国、「御国」が取り上げられる「あなた方」は45節の「すると彼の譬を聞いた祭司長たちとパリサイ人たちは、彼が自分たちについて語っていることに気付いた」と記されている「祭司長たちとパリサイ人たち」、すなわち当時のユダヤ教の指導者層である。御国が取り上げられるのはこの指導者層からであって、イスラエルの民全体からではない。

マタイは9:36で「さて彼は群衆を見て彼（女）らのために断腸の思いに襲われた。なぜなら彼（女）らはまるで飼い主を持たない羊たちのように疲れ果て、うちひしがれていたからである」と、ヘブライ語聖書でイスラエルの民の偽りの指導者層を批判する言葉（民27:17; ユディト11:19; 代下18:16; エゼ34:5）を想起させる筆致で、イエスを神が遣わした真の羊飼いとして提示している。偽りの指導者層はわが身を養い、民を養わない。これが御国を取り上げられる、（自分たちは）「御国の子ら」（と思い込んでいる者たち）である。

私たち神学部で学び、教会に通っている者はどうだろうか。マタイの批判は非常に厳しく、キリスト者にも迫ってくる。自分たちは「御国の子ら」と思って、イエスに託された宣教の使命、苦難を負う者と共に歩むことを疎かにするなら、「『アーメン、我汝らに告ぐ、これらの最も小さい者の一人にあなた方がしてくれなかった限りのことにおいて、あなた方は私にもしてくれなかったのだ。』そこでこの者たちは永遠の刑罰の中へ去っていくだろう」と言われることになる（マタ25:45b-46a試訳）。



バプテストの現代的使命

神学部教授 濱野 道雄

私も観ていますNHKの連続テレビ小説「虎に翼」は憲法14条「すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。」（第一項）の実写版とも言われます。この14条の前提、そして日本国憲法全体の基盤は、ひとつ前の憲法13条「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。」であると多くの憲法学者は言います。あなたの人種、信条、性別、社会的身分、門地が何であろうと、無条件に、個人として、つまりあなたはあなたであるが故に尊重される、と言うのです。

この「個人としての尊重」をバプテストは言い続けてきました。金丸英子教授は、バプテスト「主義」（幼児洗礼をしない、各個教会主義、政教分離等）の根底には「個」の尊重、つまり個人の尊重と各個教会の尊重が流れているとおっしゃいます（そこに個人と共同体の弁証法、つまり個人が共同体を豊かにし、共同体が個人を豊かにし、共同体が個人を豊かにする循環が生まれます）。日本国憲法はアメリカ合衆国憲法に大きな影響を受けており、アメリカで最初のバプテスト教会を設立したロジャー・ウィリアムズの影響は、アメリカ合衆国憲法に大きな影響を与えました（大統領候補のカマラ・ハリスさんはサンフランシスコ第三バプテスト教会の教会員ですが、彼女にバプテストの最も良いものが続いていることを期待しています）。

その原点には、聖書の伝える「神の無条件の愛」があるでしょう。「狼は小羊と共に宿り…小さな子どもがそれを導く」イザヤの幻（11：6）があり、「悪人にも善人にも太陽を昇らせ」（マタイ5：45）るイエスの神の「国」があります。パウロも、十字架という痛みを負い続けているキリストに救いがあり（十字架の神学）、何も誇れず神に頼ることしかできない私が、神から然りと言ってもらえる（信仰義認）と、神の無条件の愛を語ります。

聖書を貫く神の愛が満ちるところ、異なる者が、共に棲む（ジュディス・バトラー）世界、この神の「国」が私たちに約束されている。そこに手を伸ばす「祈り」として伝道の実行が、バプテストの現代的使命と私は思われています。この使命を、牧師として担おうとする人（神学コース）、クリスチャン・ワーカーとして担おうとする人（人文学コース）は、西南学院大学神学部で共に学びましょう。

キリストのからだなる教会の献身 ～協力伝道の縮図としての神学寮

神学部教授 日原 広志



牧師献身を志しておられる方には、面接で次の質問がなされるでしょう。「あなた個人の献身だと思いますか？キリストのからだなる〇〇教会の肢体の一部としての献身だと思いますか？」

ひとりぼっちの献身はあり得ません。たとえ現時点の自意識において神と我との1:1の霊的出来事と思えても、献身の主体はあなたではなく各個教会なのです。受験資格の「信仰歴〇年」は個人の出願権利というに留まりません。それは各個教会の肢体になるための最低ラインです。どうか各個教会にとってあなたが、うちの教会を離陸場所としたがっているお客様ではなく、キリストのからだを引きちぎられる激痛に耐えて血まみれで送り出す一部であるような、そんな「ひとりぼっちじゃないあなた」「キリストのからだなる教会の肢体としてのあなた」となって献身して下さい。そのための「信仰歴〇年」です。

西南学院大学の神学教育には三本の柱があります。①神学部における神学の学び②研修教会における研修・奉仕③神学寮における共同生活・自治です。このうち最大の特徴は③でしょう。

神学コースには全国諸教会伝道所から献身者達が集います。国籍、人種、出自、性別年齢、社会人経験は様々です。でもその属性が、対話の双方向性が担保されなくなるような人間関係の固定化・階層化につながることはあってはならないとは言うまでもありません。献身者は履歴書で表され、存在として確認できる肉の個人以上の存在です。なぜなら献身の主体は各個教会だからです。その方の背後には各個教会があり、一人一人の後ろには激痛と祈りを以てその方を送り出した各個教会があるのです。今日も血と涙を流しながら献身者のために祈り続けている各個教会があるのです。連盟において、各個教会が立地、規模、年数によらず、キリストのからだとして等価であるように、献身者も等価です。

各個教会の代表が共に生き、共に学び、相互不干渉主義や無関心主義ではない自立と協力という困難な課題を、イエス様に導かれながら、生活レベルから実践して行く場として神学寮があります。生活という、きれいごとだけではない、生の全領域に亘る全人的交わりを通じて、人間関係の紡ぎ方、破れ方、壊れ方、繕い方、和解と共生を体験する「協力伝道の課題と喜びの縮図」としての寮生活なのです。どうかこの独自のシステムを持つ西南で、牧師となる上で不可欠なものを、活ける神から学んでください。

Think Globally, Act Locally

神学部教授 黄 南徳



私たちは今、グローバル化の時代を生きている。マスメディアとインターネットの発達により、時間と空間の制約を超え、互いに密接に影響を与え合いながら生きる世界市民となった。グローバリゼーションによって、単に迅速な情報交換だけでなく、国の政策や個人の考え方や生活パターンにも影響を与え合う世界人になったのである。そして、グローバリゼーションの影響により、地球温暖化をはじめとする環境の問題はすでにみんなの課題となり、イスラエルとパレスチナの紛争、ロシアとウクライナの戦争、ミャンマーの人権の問題などは、もはや遠い外国だけに限定されるニュースではない。このような状況の中で、私たちはどのように世界市民として生きることができるのだろうか？どのように平和を築きながら生きることができるのだろうか？平和を築くことは一人ではできない。平和を実現しようとする夢とビジョンを持つ市民の協力を通じた国際連帯に参加しなければならない。これは、私たちがアジア人としてアジアを見据え、世界に向かって進まなければならないことを意味する。

私たちはアジアの青年として、様々なアジアの青年と会って対話し、アジアが直面している課題について学ぶ機会を作らなければならない。例えば、タイにあるアジアキリスト教協議会の青年リーダーシップ開発のための教育プログラムや、韓国の済州島にある「開拓者たち」が主催する平和のための航海プログラムに参加することができる。そして、東アジア平和センター・福岡が主催し、本神学部が共同開催する「アジア青年平和学校」に参加し、日本と韓国の歴史を学び、アジアの平和定着のために米軍基地に反対する実践的な行動をすることができる。

第3回「アジア青年平和学校」が「非武装地帯で歌う平和の歌」というテーマで8月12日から15日に韓国の鉄原で開催された。日本人学生10人、韓国人学生10人、一般市民10人、計30人が暑い中、平和についての講義を聞き、平和展望台に登り、遠く北朝鮮を眺めた。朝鮮戦争当時、多くの死傷者を出した白馬高地を見て、また国境の村体験を通じて、朝鮮半島の分断がアジアの平和を築いていくうえでどのような意味があるのかを振り返る時間を持った。そして、参加者の交わりと分かち合いを通じて、文化と言語を超えた平和の友となることができた。

平和は国家や政府がもたらす贈り物ではなく、民の力によってのみ実現できるものである。連帯する民が実践を通じて築くのが真の平和である。来年は第4回をより多くのアジアの若者を招待し、沖縄で開催しようと準備している。今こそ、世界市民として国境を越えてお互いの心を開き、平和と正義の世界に向けて共に歩むべき時である。福岡から、さらに広いアジアへ、そして世界へ、共に平和をつくる人になりましょう。



あなたと神の物語

神学部講師 藤方 玲衣

ごきげんよう。私はこれをすてきな挨拶だと思います。このことばは、相手を気遣う「ご機嫌よくお過ごしですか」という問いかけだそうです。この文章を読んでもらっているあなたは、今、どのように過ごされていますか。どこかに痛みを抱えていますでしょうか。心配ごとがあるでしょうか。満ち足りたような気持ちでしょうか。悩みや苦しみのなかにいるでしょうか。穏やかな感情に安らいでいるでしょうか。

「あなた」は、どんなひとなのでしょう。これまでにどのような経験をしてきたのでしょうか、いまはいかなる状況に置かれているのでしょうか。これからについて思いを馳せたりしているのでしょうか。この瞬間に、どんなことを考えているのでしょうか。誰と一緒にでしょうか、またはひとりででしょうか。……私は、「あなた」のことをなにとつ知らないかもしれませんが、これを読んでもらっている「あなた」は確実に存在しています。かけがえのない命を抱えて、ほかの誰のものでもないの物語を綴っている「あなた」がいるはずです。

私は、「神学部」の教員として2年目の年度を迎えました。この仕事を通して、多くのひとと出会い、たくさんの声に触れています。神学部だけではなく、多彩な背景をもつ学生みなさんと、「神学」という営みについて考える機会に恵まれています。「神」について考え、語るとはいったいどのようなことなのか、私は逡巡し、懊悩してばかりです。ですから、他者の声に触れたいと思うのです。あなたは、「神」について、何を考え、何を語ろうと思うのでしょうか？ 書物に記されたことばのなかに、この問いかけへの応答を見出すこともあります（「聖書」はこの問いにかんする物語の宝庫です）。会話のなかや、学生さんが書いてくれたコメントカードのなかに見出すこともあります。

「神学」という営みを巡って、私はこれからも迷うでしょうし、ただひとつの答えや道筋などは見つからないでしょう。ただ、今の時点で考えていることがあります。「神」についてのことばを紡ぎだすのは、ひとりひとりの人間です。つまり、その根源には、その個人のかげがえのない生の物語があるということです。ひとつの命は、それが歩む道のうえで、「神」と出会うのだと思います。「聖書」は、そうした証言の物語です。「あなた」だけの物語から、あなたと神の物語が生まれ、神についての言葉が紡がれてゆくという過程を、神学と呼ぶのかもしれない、と、今の私は考えています。もちろん、私の物語も途中でしようから、これは確信ではありません。

グローバルな視点から 過去と現在を理解してみる

神学部准教授 Girardo Rodriguez



今年7月にNHKの歴史番組『大追跡グローバルヒストリー』で、戦国時代にメキシコに渡った謎の日本人について放送されました。(2024年7月8日〈月〉[総合] 午後7:57~8:42放送「上田晋也がNHKの歴史番組で初MC! 歴史に秘められた謎をグローバルな視点で大追跡 謎の戦国日本人奴隷▽サムライの恋と冒険▽メキシコ」)。このドキュメンタリーの中心人物はフェルナンデスという日本人の青年です。フェルナンデスは日本に駐在する外国人のために働いていました。この外国の主人はユダヤ人でした。

やがて、異端審問が日本に到着して、ユダヤ人の主人はフェルナンデスを連れてフィリピンに逃げましたが、当時のフィリピンはスペインの植民地だったため、そこでもまた異端審問が広く活躍していました。結局二人とも逮捕されてメキシコに送られることになりました。

こうした中ある時点で、そのユダヤ人の主人は亡くなり、フェルナンデスはメキシコで奴隷として売られ、多くの困難と虐待を経験しました。しかし幸いなことに、かつてのユダヤ人の主人の息子たちに救われました。この息子たちは、異端審問から逃れるために故郷のスペインを離れて、メキシコに渡ってきたのです。

ドキュメンタリーではこの物語に他の詳細も加えられていますが、歴史をグローバルな視点から見る必要があると主張しています。フェルナンデスの物語は、日本史、メキシコ史、スペイン史、ユダヤ史の教科書にはほとんど登場していません。これを見て、歴史上、まだ私たちが知らない未知の事例がどれだけあるのだろうかと思ふ人もいるでしょう…。

イベリア半島からのユダヤ人の追放、アメリカ大陸のヨーロッパ人による植民地化、当時スペインにおけるカトリック原理主義の展開、日本におけるキリスト教の導入…これらすべての出来事は、従来の国家史の見方からはほとんど関係がないように見えるかもしれませんが、グローバルな観点から見ると、新たな絡み合った足跡が明らかになると思われます。

あの時代以降に起こった複雑な社会的、文化的相互作用は、グローバリゼーションの視野を通して見る必要があります。そして、これは過去の出来事だけでなく、ますます現代の世界にも当てはまります。このドキュメンタリーを見て、私は神学部でグローバリゼーションの視点を導入し続けるよう励まされました。新入生が私たちの学部に入學し、さまざまな分野の確かな知識を習得すると同時に、現代の複雑なグローバル社会における新しい接点を一緒に見つけていくことを期待しています。

アジア青年平和学校（韓国、鐵原） 参加報告

神学部神学科4年 長尾 基詩

コリアの分断について

2024年8月12日—15日、第三回アジア青年平和学校が開催されました。今回の開催地は韓国・鐵原（チョロン）です。非武装地帯に最も近いこの土地には国境線平和学校という施設があります。大韓民国・および朝鮮民主主義人民共和国（以下、コリアと記載）は1950年—1953年に及んだ朝鮮戦争により分断状態に置かれています。両国は今でも休戦協定中の戦争状態にあり、韓国は戦時国であるといつて差し支えありません。この事柄は決して両国当事者間の問題ではなく、むしろ大国の思惑に挟まれた結果としての分断であり、冷戦下における代理戦争を象徴するものです。本来、コリアは一つの国であり、一つの民族でありました。

今回の平和学校で、統一がコリアの人々にとってどれだけ真剣な夢となってきたかを思い知らされることとなりました。そして分断を引き起こした責任の担うべき一端は、間違いなく日本にもあります。日本による植民地主義、侵略がコリアの領土問題を引き起こしたことは否めません。その歴史認識を踏まえて、アジア青年間の交流というものは考えなくてはならないと思いました。

平和学校の概要

今回の旅では日本、韓国、沖縄から学生を中心に約30名の参加者が集いました。プログラムは右の通りです。

時間	8/12（月）	8/13（火）	8/14（水）	8/15（木）
6:00~8:00		生態の森を歩く黙想 (ドンジュサンソン)	生態の森を歩く黙想 (ソイサン)	生態の森を歩く黙想 (ソイサン)
8:00~9:00		朝食	朝食	朝食
9:00~9:30				後片付け
9:30~10:00		講義（II） (質疑応答)	非武装地帯 平和巡礼 (民間人出入統制線平和展望台～月井里驛～白馬高地～勞動黨舎)	閉会式
10:00~11:40				出発 (10:00)
11:40~12:00		非武装地帯 集落体験		
12:00~13:00		昼食（村の食堂）	昼食（村の食堂）	
13:00~17:00				
17:00~18:00	登録 (宿の案内)	非武装地帯 集落体験	漢灘江 ラフティング	
18:00~19:00	夕食	夕食	夕食	
19:00~20:30	講義（I） (質疑応答)	映画上映 (高地戦)	プログラム評価 (グループ及び全体) (～21:00)	
20:30~22:00	オリエンテーション アイスブレイク	グループと 全体発表	国際親善交流 (21:00～)	
22:00～	就寝	就寝	就寝	

アジア青年平和学校報告動画
<https://www.youtube.com/watch?v=biQKCDRDSk8>



講義では実際に現地で平和活動をされている方や、長年コリアの平和について積極的に発信しておられる議員の方にお話をさせていただきました。いずれも日本には聞くことのできなかつた見解、平和への思いでした。またそれを受けて参加者同士がディスカッション、意見をぶつけ合います。韓国から、沖縄から、日本から、それぞれの背景を持った人間が自分の思いをぶつけ合います。今まで平和や分断という状況を真面目に考えることができていなかったが、現実には直面した課題として国境線を見ることでこれまでの考え方が変えられたという意見や、韓国の青年の中には軍役を経験した方もおり、平和にはある一定の軍事的抑止力が必要だという意見も出されました。あるいは現状のイスラエル・ガザでの紛争において、私たちができることは何かと問われたときに、虐殺をする勢力に協力的な企業に対して消費行動のボイコットを行うべきだという意見が出ました。ただそれに対して、あまりにも企業側のグローバル化が進み、消費行動の及ぼす影響が多化する現状に対して無力感を感じるという素直な感想も挙げられました。すぐには解決できない問題を話し合い、自分の思いを分かち合ったからこそ生まれる独特な絆のようなものがこの平和学校にはあります。

この旅で参加者は韓国、沖縄、日本それぞれに隣人を持つことになります。このような人が国家に一定の影響を持った数いれば、戦争を起こすのは難しいでしょう。この活動はいわばアジアの平和への種まきです。その芽が出るまで、歩み続けたいと思います。



これからの神学部と これからの教会・伝道所が、 共に祈りあう事を願って

神学部教授 濱野 道雄

諸教会・伝道所の皆様にはいつも神学部を覚えて祈り、支えて下さり感謝です。学生会から「諸教会に向けて、西南神学部の現状など踏まえてのメッセージ」を記しようとの事、私の考えるところを記します。

今、牧師になる神学コース生が大幅に減少している事はご存じの通りです。要因分析もしましたが別の場で述べるとし、ここではこの減少に伴い、神学部が「教派神学校」であり、かつ「大学の一学部」であるという、この両立が今までの形では難しくなる事を記します。今までは各教員が他学部教員より多くの働きをして両立を維持してきましたが、外部から見ればそれがさらに非効率に映るようになったとも言えます。

最悪な場合「伝道者養成ではなく、実際一般学生の教育が主ならば、神学部を解消し、国際文化学部神学科になる方が良い」という声もあがります。しかしこれでは伝道者養成のカリキュラムが疎かになるのは勿論、神学部が担ってきた西南学院の建学の精神「西南よ、キリストに忠実なれ」の維持や現代的展開は薄まり、商業原理や文科省によって導かれる大学になっていくかもしれません。例えば神学部が開催してきた天皇制を考える集会等も難しくなります。

ただ「教派神学校」かつ「一学部」である事をポジティブに、神に招かれた歴史的機会と捉えられると私は思います。例えば、牧師になるのではない人文学コース生卒業生に「就職説明講演会」をしてもらっていたのですが、クリスチャンとしてのアイデンティティを持ち、この世界の中で神の「国」を追い求める職業人がその人々から多く出てきています。またバプテストのアイデンティティを大切にしながら、他派の学生や教員と共にエキュメニカルな財産や機会を活かした神学教育も近年では展開されています。実際、神学部教授会の多様性は、国籍、性別、年齢、経験等、豊かなものになっています。以前より少し「緩やかに」なりつつ、それを多様性を喜ぶ神の「国」の先取り、「豊かさ」として捉えていけるのではないのでしょうか。

具体的な課題の一つに、神学寮の運営もあります。大きな神学寮に、現在は数える程の神学生が住んでいます。大学としては「施設の有効活用」を求めます。元々この寮は諸教会・伝道所の献金によって費用の三分の二まで出して頂き出来たのだと説明しますが、実際毎年の運営費は赤字です。それだけでなく、他派の神学校でも同じですが、少

ない人数の共同生活にはデメリットもあります。寮では人間関係構築についても学ぶのですが、あまりにも「逃げ場」がなくなり、健全な対話に適さない環境になるとも言えます。そこで改革が求められますが、以前より「緩やか」に多様性を求め、ただしクリスチャンのアイデンティティは忘れず、牧師になる人以外も入寮する「基督教教育寮」にするのもひとつかもしれません。このような形は、例えば立教大学のグローバル・リベラル・アーツ・プログラムに伴う学生寮などのケースがあり、元々ヨーロッパの大学において古くからあります。そこで牧師になる人だけでなく、他の教会員となり教会を支える人との協働を学べ、バプテストの「信徒の教会」の形成に資する教育寮になる可能性もあります。

そして神は変わらなくても、協力伝道の形が変わったように、教会も形を変えるかもしれない時代の教育が可能になるでしょう。教会自体が以前より少し「緩やか」になる、これまでの「集める教会（バウンデッド・セット）」を保ちつつ、加えて「出て繋がる教会（センタード・セット）」でもある、この両立を「信徒の教会」で実現できるという事を、2023年の壮年大会で講演致しました。これまでの教会籍という「枠」も捨てず、「イエスのいる風景」「キリストの香り」を共に喜べる、教会籍がない人々とも「見えない教会」（TCU『データブック2023』。バプテスト的に少し注意が必要な表現）を形成していく方法です。これは実際、私は福岡連合社会委員長ですが、連合で少なくない教会が行っている生活困窮者支援について公開学習会をした際、福音的に現実化してきている事が分かりました。また牧師の「兼職」についても、例えばブラジル聖公会の神学校では神学生全員に将来「兼職」できるよう奨励しているそうですが、西南でも、もし必要ならば、またその事で福音が組織としての教会の外にも及ぶならば、できるようにしておく教育が必要だと私は思います。これも一つのセンタード・セットとしての教会の在り方です。

神学的に言えば「公共神学の間としての教会」です。アンセルムスの古典的「知解を求める信仰」としての神学を越える、教会だけが真理の答えを独占していると考えない、教会外の人々とも神の「国」を求めて共に棲む、「緩やか」な神学・教会理解となるでしょう。

その事で神学部のスタンスも問い直されます。これまで神学部は、神学生が「退路を断って」入学時点から牧師になること前提の制度設計をしてきましたが、今後、神の御心ならば「引き返せる」場に「緩やか」にする事も考えた方が良く、私は思っています。入学し、実はこの道ではなかったと学びや寮生活から知ったとしても、退路がないわけですから大変引き返しにくく、他の道を探しづらいのです。そのような学生は実際にいますし、それは決して学生の人格の問題でも挫折でもなく、その人により相応しいクリスチャンとしての生き方を教員と共に考えればよいだけの話です。これは多くの他派神学校でも課題とされており、例えば入学し最初の半年を教会でインターン生活をし、本当に牧会者としての適性があるか見極める神学校もあります。そのような中、神

学コースから人文学コースへ移る、逆に上記の共なる寮生活等を通して人文学コースから神学コースへ移る事がある、そのような風通しの良さが求められるかもしれません。

それは教会・伝道所と神学部の関係にもつながっています。これまで各個教会で数年の教会生活と推薦状があれば、入試では15分程度の面接で判断してきました。ただ、その難しさは実際にあり、近年は特に教勢との関係もあり厳しさに直面する各個教会・伝道所にのみ判断を負わせる事も難しくなっているかもしれません。勿論、教会・伝道所には、自分の教会で牧会をしてもらいたいような「練られた」献身者を送り出して頂きたいのですが、人間の判断には限界がありますので、この業を神学部での時間も用いてできないだろうかと思うのです。

こうして少しずつ、できるところから神学部も変わりたいと願います。これらは神学部だけではできません。例えば奨学金はどうするのか、丁寧な議論が必要です。また卒業生の赴任について、現在は常務理事と協力しながらも神学部長が担当責任者ですが、以前のように常務理事に担当責任をお渡ししてパワー（決定権）の分散をした方が良いかもしれません。「引き返す」判断も、教会への赴任推薦も神学部長が行うのでは、パワーの集中し過ぎになるでしょう。

いずれにせよ教会・伝道所の皆様と「共に祈りあう事」がなければ、この「曲がり角」を歩んでいけません。教会の無い神学はありませんし、神学の無い教会もまたありません。どうぞこれからも共に祈りあって下さいますよう、お願い致します。



特集記事

他派神学生にとっての 西南学院大学神学部

神学部神学科3年 伊藤 健一
日本キリスト教会福岡城南教会長老

編集委員会から依頼された題は、「他教派から見たバプテスト」ということであった。ただ、この題について考えれば考えるほど、自分がバプテストをよく知らないことを気づかされる。福岡で教会生活をしていれば、バプテスト教会の信徒の皆さんとの交流の機会は少なくない。もうすでに20年以上続いている超教派のイベント「讃美の集い」に

も日本バプテスト連盟の教会の皆さんが多く参加されているので、その委員長であるわたしとの接点は確かにある。しかしわたしはバプテスト教会で礼拝をまもったことはないし、イングランドで生まれ、浸礼を施し、カルヴァンの流れを汲み、アメリカ最大の教派であり・・・といった教科書的な知識以上のことをまだ知らずにいる。そのような段階のものがバプテスト教会について考えを述べるのにはまだ荷が重い。この題は、もう少し後に、改めて文章としてまとめるお約束をし、ここでいったん保留にさせていただきたい。

その代わり、ここでは「他派神学生」であるわたしの思いをいささか記させていただきたい。正直に申し上げて、これまでのところ、西南学院大学神学部がバプテスト教会の神学校であるゆえの違和感はない。授業の中でバプテストという言葉やバプテスト教会の現状などについての話が出てくことは少なくないが、そこで述べられる内容に関して違和感はない。もともと、西南学院大学の今井学長はわたしの教会の教会員であり、受験前に相談したときも、「自分にとって西南に違和感はない」とはっきり言われたし、同じ教会で礼拝をまもり、同じ神学的伝統に立つ韓国の教会のご出身である黄先生が教鞭を執られる学部であるこの学部には、入学前も、在学している今も、何も違和感はないのである。

わたしはこの大学の神学生であると同時に、現在、日本キリスト教会神学校の委員でもある。日本キリスト教会神学校は、埼玉県川越市にある教派立の神学校である。現在在籍学生は2名、学生とは委員会の折りに意見交換をし、励ましあっている。講師は日本キリスト教会の牧師が中心で、在籍学生がいるときのみ必要な科目が開講される。献身者が少ないことは、大きな悩みである。図書館はとても充実しており、隣接して設置されている「カルヴァン研究所」の蔵書も貴重である。わたしはこの神学校で開催される委員会に参加する折りに、この図書館に立ち寄ることをとても楽しみにしている。

西南学院大学はUniversityであり、日キ神学校より広い学びをし、大学院まで進んで研究を続けることができる。これは大きな魅力である。今後わたしたちが取り組むべき課題は、日本宣教に限らない。諸外国の方々と伴って海外宣教にも従事していく必要がある。そういう時代を迎えている。当然、海外の神学大学や神学研究者との議論なども活発に行なわれる必要があると思う。西南学院大学神学部でもそのあたりの課題には苦慮されているように思われる。先生方のみならず、わたしたち学生もこうした課題に取り組むことができるようになりたいと思う。このことをともに課題として認識して取り組んでいきたい。



佇立

神学専攻科 奥田 悟

推薦教会 東京北キリスト教会

研修教会 福岡城西キリスト教会

最終学年を迎え、主の御心のもとに許されれば残り半年、という時に、私はキーボードの前に坐っています。専攻科は修了論文、招聘、単位取得の平行で三重苦と聞いたことがあります、ご多分に漏れず忙しいもの。神学生が少ないので、今年は神学寮長も兼ねている現状。そんな忙しさのさ中にも、やっと牧会に出発できるのではないか、という展望に心は軽く、また多くの方々に祈り支えていただいている感謝をかみしめています。主の大いなる導きに大きな希望をいただきながら、毎日を祈りと共に過ごさせていただいている神学生の日々です。東京北教会から推薦をいただき、神学生の生活も祈りと支援で励まされ、現在の研修教会である福岡城西教会では、共に50周年を祝い、温かい皆さんの守りに、感謝感謝の現在地。

佇立。過去、現在、未来とそのさなかにたたずんで立つと、改めて想うところがあります。キリストの福音宣教の確かさが様々な方向から時間を見つめると抽出されるところがあったりして、私もその時間の中に主の導きによって立たせていただいている実感が更新されたりします。様々なものが様々な時間幅で変化していきます。人々の努力むなしく、消え去ったものもありますが、だからこそエッセイの株が露わになった所もあったりする事を思います。そこから芽が萌え出で、主が新しい葡萄酒を新しい革袋に入れるその日を、目を覚まして真剣に待ち望みたいと思うのです。

これからどんな教会、どんな方々と主は出逢わせてくださるか、不安込みの期待は、私に「楽しみに待つ」という事を改めて教えてくれます。静寂と深慮の時でもあり、神の時間は確実に動いていることに畏れと待望を胸に、神学生としての残りの期間を歩ませていただきたく思います。

今年の私の修了論文のテーマは、「信仰の内省化」というものです。自分の人生は、命は自分のもの、とすれば当然、信仰も自分のもの、ですが、果たして本当にそうでしょうか？という事を、ごいっしょに考えたい。よりよい未来を、よりよい社会を、よりよい自分を人間は追い求めます。と同時に、怠惰、墮落、罪を追い求める私たちでもないですか。その相克に追いやられて、キリストが枕する所もないのでは、クリスチャンも立つ瀬がありません。教会も立つ瀬がありません。そんな事を考える、内省も私は大切にしていきます。キリストの指し示す私たちの内面、内側には何があるのでしょうか。人間にはそれを探す権利があると私は思っています。それは神に赦されている、という意味で。是非、宗教、キリスト教、信仰の道を、私が仕えていく方々と一緒に、探していきたいと願います。神学生をめぐる協力伝道の働き、祈りに心から感謝するとともに、精神を尽くし、思いを尽くして、今後とも主の道を歩ませていただきたく存じます。どうぞよろしく願いいたします。



何千年経っても変わらないもの

大学院博士前期2年 吉田 睿濫

推薦教会 福音村バプテスト教会

研修教会 福岡ベタニヤ村教会

ハレルヤ！今も生きて働かれておられる主の御名を心から賛美します。

ついに最終学年ということで、残り半年の神学生期間をどのように過ごそうかと思うと同時に、引越しの荷物が想像以上に多くなりそうで少々恐怖感も感じつつ片付けられるものから荷物をまとめ始めながら今を生きております。

私が最近よく口にする言葉があります。「10年後の教会」という言葉ですが、皆さんは10年後の教会の姿を想像してみたことはありますか。私は神学校で学ぶために福岡に7年前に引っ越してきましたが、単純に今から7年前の教会の姿を考えた時、今とは確実にさまざまなものが変化してきたということは、多くの方が痛感できるものではないかと思います。コロナウィルスが世界的に蔓延し、人と人との距離を引き離したことによる劇的な時代変化を私たちは経験しました。交わりを大事にしている教会思想も、直接的交わりをすることは飛沫感染による命に関わる危険があるということで、強制的に制限されてきた経験をしてきました。現在はコロナも日常的立ち位置となり、マスクを外し、交わりが回復しつつあるのは非常に感謝すべきことですが、やはり過去の交わりのようにはいかない。いや、もうそのような交わりのスタンスはもういらない、という考えに人々は変わっているようにも思えるのです。そのような中、今から10年後の教会に再び目を向けるとき果たして教会は、「教会」として立ち続けることができるのでしょうか。私は正直、未来の教会に対して危機感を覚えております。教会は、大きく二つのミッションがあると思いますが、一つは礼拝であり、もう一つは伝道です。教会はこれまで礼拝を非常に大切に、礼拝の意味付けや、誰もが共に生きる礼拝の場を作り上げるためにさまざまな努力をしてきました。しかし、それと同じくらい「伝道」に真剣に向き合い、大切に、実践してきたのだろうか、と問われると果たして自信を持って首を縦にふることができるでしょうか。もちろん今現在、人生に苦しみや悩み、憤りを覚えながら必死に礼拝に参加する方々と共に希望を見上げ、共に生きることは教会にとってなくてはならない恵みです。しかしそれに伴って、私だけでなくその恵みを必要としている教会の外にいる人々や、現在ではなくとも未来にその恵みが救いと希望となって生きようになる子供達や大人たちのために、教会は立ち続ける必要があるのだと思うのです。そして神学校が必要な理由は、まさに誰かの「必死」のために共に生きようとする者の献身をより深く、より強くさせ、希望の福音を語り伝えるためにあるのだと私は思うのです。時代がどう変わろうとも、教会は、そしてキリスト者は神さまから与えられ、経験したその素晴らしい祝福の恵みと福音を隣人に、地域に、世界に伝え広める使命があるのです。

主の素晴らしい祝福と守り、導きが豊かにありますように。



誰にも見られない所の働き手

神学部神学科4年 長尾 基詩

推薦教会 府中キリスト教会

研修教会 姪浜キリスト教会

今年度から西南学院史料センターでのアルバイト業務を頂きました。先輩である原田さんからの引継ぎに感謝しつつ、やりがいをもってこの仕事をさせていただいています。資料整理と一言で言いましても、単純にセンターに届く大量の紙をファイルに収めるにとどまりません。その内容を吟味し、後になってそれを閲覧、研究したい人のことを思いつつ、適切な形で収め、劣化を防ぎ、一目でわかるような資料内容説明文を添えなくてはなりません。時にこの作業には大きな忍耐と自己との闘いが生じます。宣教団の残した会計収支表（約100年前の、手書きの、10kgのものです）を整理した時などには永遠に思えるページ一枚、一枚のスキャニング作業に、この仕事に報いてくれる人はいらるのだろうか、この仕事に本当に意味はあるのだろうかと自問してしまいます。

しかし時に喜ばしい発見と大きな励ましを受けることがあります。バプテスト教会の歴史を作ってきた先達の足跡をたどってみると、それが決して生半可なものではなかったことがよくわかります。宣教師は文字通りその命のすべてを神にささげ、日本の伝道に働いたのです。その伝道の在り方は大いに批判的に考えられなくてはなりません。ただその情熱だけは、疑いなくそこに存在し、現在の私たちの礎となっていることを史料は示します。宣教師だけではありません。日本において日本人キリスト者として教会のために働かれた教役者のメッセージは人々を大いに励ましたことでしょう。宣教師自身が慰めを受けたという記録もあります。このような働きが私たちが形作っているということを知ると、私たちはその責任に応えうるだろうかと襟を正される思いです。

輝かしい歴史を見ていけば見ていくほどに、もう一つのことが私の中で頭をもたげてきます。歴史の中には含まれなかった、私たちがみることのできない働き手がかつていたのではないだろうか、必ずいるだろう。と思います。実際、女性宣教師は今までのファイリングでは、～～夫人とされ、常に男性宣教師の名前しか知られるところがありませんでした。彼女らがバプテストに対して大きな貢献を果たしたことは事実にもかかわらず、です。私たちが知らないところで働いてくださっている方がいるということに思いを馳せるというのは神学生としてとても大切な事柄であると思わされます。すべての教会において、神様のため、隣人のために働かれる人に敬意を表します。

前期を振り返って

神学部選科1年 大野 学

推薦教会 釧路バプテスト教会

研修教会 長住バプテスト教会

前期の授業が終了しました。慣れないことばかりで、体重もどんどん落ち、8キロくらい痩せました。単位取得も、いくつか落としてしまったものもあり、授業自体も難解で、出席するだけでよく理解できませんでした。入学当初の、やる気に満ちた自分はどこへ行ってしまったのか。ただ入学したことを後悔するだけの日々でした。ありがたいことかもしれませんが、周囲が優秀に見え、どんどん自己嫌悪が募り、毎日が憂鬱でたまりませんでした。

これではいけないと、知人の牧師先生にアドバイスを仰ぎました。その先生は、神学生時代にしなければならないことや、自分の経験談を語ってくれ、かつ自分が学生時代に提出したレポートまで見せてくれました。体系的にやるべきことを教えて頂くことで、自分に足りないものがはっきりし、少し安心を得ることができました。後期の授業の受け方についても改善しなければならないと痛感しました。そして、以下のアドバイスを授かりました。神学部の授業では、各回、発表の担当者がテキストを要約して臨むのですが、自分が担当ではない時も、自分なりにテキストを要約し、自分ならどのようなレポートを書くか考えながら、授業を受け、最低1回は質問しなさいということでした。

書いたり、口で言うのは簡単ですが、いざ実行となるとかなりハードルが高いです。どれだけ、この教えるを実践できるかわからないですが、自分の力ではなく、主の力により頼み祈りながら、後期は生活していこうと考えております。

最後になりましたが、私を支えて下さった全国壮年会連合、研修教会、推薦協会、及び先生方、学友の皆様に心から感謝いたします。





新たな恵みの中で

神学部神学科3年 張 恩榮

推薦教会 西福岡のぞみキリスト教会

研修教会 西福岡のぞみキリスト教会

牧会への献身を決心して祈り待ち続けて3年余、ようやく主イエスの召し出しを頂き、今年の春、西南学院大学神学部に入學しました。神学寮での初めての生活や、初めて会う先輩や同期とのぎこちない会話など、人々との出会いはすべてがときめきの連続でした。自分は未熟で、何もかもが拙かったですが、神学生仲間と共に歩むことで、お互いに支え合い、慰め合うことが大きな力となりました。

最初の緊張は一時的なものであり、学業に追われたり、難しい課題に取り組んだり、仲間と悩みを共有したりすることで、日々成長や学びの機会を得ています。特に、神学部チャペル委員として、チャペルの準備や進行、奏楽奉仕に携わることで、そして毎日神学寮で早朝礼拝が守られていることに、大変感謝しています。今では神学寮や神学部の教室、チャペルがすべて貴重で輝かしい瞬間だと感じています。

「どのような牧師になりたいか」と問われたとき、最初は答えが見つかりませんでした。しかし今では、主イエスに喜ばれる働きができる牧師を目指して、夜遅くまで説教の準備をしたり、週報を作成したり、司式や奏楽奉仕、事務作業などを行い、教会での日々が充実しています。

「ところが、その男は勝てないとみるや、彼の股関節に一撃を与えた。ヤコブの股関節はそのせいで、格闘をしているうちに外れてしまった。」(創世記 32:26) ヤコブは夜が明けるまで神の使いと格闘して祝福を求めました。そのとき、主は彼の股関節を打ったために彼の中心を回復させました。その日以降、ヤコブは一生足を引きずりながら、ただ神に頼り、謙虚な生活を送るようになりました。肉体に障害がある場合でも、神はそれを祝福の道とし、人生を新たに導いてくださると信じています。

実は神学部に入學して左目の視力がほとんど失われ、日常生活や授業に支障が出ました。韓国で眼科検査を受けたところ、重度の緑内障と白内障と診断されました。左目の視神経はほぼ機能しておらず、右目も視神経の35%が損傷しているとのことでした。驚きと衝撃を受けましたが、現状を受け入れ、両眼の白内障の手術を受けました。その結果、以前より視力は改善しましたが、緑内障の影響で視野が少し狭くなっています。幸いにも、緑内障の治療を続ければ症状の進行を抑えられるそうです。

主イエスは時に、私たちが誇りや欲望に取り憑かれているとき、私たちに謙虚にし、新たな恵みをもたらしてくださることがあります。主イエスが十字架の苦しみに耐えてくださったように、私の眼の苦痛を通じて神が私を新しく造り直してくださることを期待しています。神が授けたこの肉体の苦しみを、主イエスと共に堂々と耐えることができるように、この苦しみの中で、十分な恵みがあるという告白が心の奥から湧き出てくることを願いつつ、み子イエスの十字架の福音が私を包んでくださるように祈ります。そして、いつも良いものを与えようと顔を照らし、顔を向け、目を離さない主の視線が常に留まる一人となることを祈ります。

ここには充実した学びがある。

神学部神学科3年 伊藤 健一

推薦教会 日本キリスト教会福岡城南教会

研修教会 日本キリスト教会福岡城南教会

4月から始まった新しい学びも、7月で一区切り。1学期の授業は前半で終わり、後半は学期末試験、レポート。それもすべて7月中に終わり、8月は完全オフ。思えば3月末で定年退職して、4月から完全オフとなるはずだった。しかし神学部で学びが始まり、待っていたのはこれまでになく多忙な4か月だった。

わたしはこの3月、これまで37年間勤めてきた北九州市立大学を定年退職した。前半の20年は文学部で、後半は外国語学部英米学科で教員として務めた。初めは学部から大学院まで学んでいた英文学を講じていたが、その後、学部学科の改組に伴い、英米文化、異文化間コミュニケーションなどの領域までフィールドを広げ、外国語学部への移籍に伴い、通訳学を主たる教育研究領域としてきた。またその間、国際教育交流センター長、外国語学部長、学長補佐等を歴任することとなった。北九州市立大学では本当に充実した教育研究環境を備えられ、管理運営についてもリーダーシップを発揮する機会を提供していただき、深く感謝している。

しかし、いざ定年退職が近づいてくると、退職後は悠々自適の生活ではない選択肢をとるべきだと感じるようになった。わたしは2018年から日本キリスト教会九州中会の常置委員の一人に選ばれ、ともに九州にある無牧師教会への対応に心を砕いてきた。わたし自身、無牧師の教会で説教をする機会もあった。こういう中で、退職後は神学の学びをしたいと考えるようになった。牧師に、オンラインで学べる神学校で学びを深めたいと相談したところ、西南学院大学神学部で学ぶことを勧められた。「良い先生方がいらっしゃる」というのがその理由であった。神学部とは関係ないが、かつて勤めた学部のライバル学部のある大学で学ぶことになるとは、奇しき縁である。

昨年まで、わたしは学期当たり、学部の授業5コマ、大学院の授業1～3コマ教えてきた。ところがこの4月から、神学部で受講している科目は11コマ、そして非常勤講師として北九大で2コマ教えるという猛烈なスケジュールで、4月中はあまりの過酷なスケジュールに、連休が待ち遠しくて仕方がなかった。しかし慣れというものは驚異的なもので、その後はこのスケジュールに順応して、無事に第1学期を終えることができた。

9月末からは2学期が始まる。また忙しい日々を迎える。夏季休暇で緩んでしまったので、最初のうちはまた同じような苦しい思いをするかも知れない。しかし諦めずに食らいつき、終わりまで「賞を受けられるように走り」たいと思う。ここには充実した学びがあるのだから。

編集後記

今年も神学部誌『道』を発行することができ、大変うれしく思います。実際に紙面が皆さまの手元に届き、現在の神学部の様子、神学生の思いや教授の様々な方面からの知識が諸教会の方々に共有されることを心から願います。

今回、『道』の編集テーマを「共に祈りあうことを願って」とさせていただきました。神学部には、神学生数の減少に伴い、大学内部での教育の在り方や、寮生活、学生会活動などにおいて様々な課題や乗り越えなくてはならない壁が存在します。召命に応え、献身する人にとってより良い情報を明確に開示しなくてはならない使命もおっております。そのような西南学院大学神学部の「道」を私たちは歩んでいるわけですが、それはもちろん連盟諸教会すべての方々と共にある歩みであり、皆様の祈り無くしてはありえない歩みです。この『道』を通して、諸教会の皆様と祈りを一つにし、将来を望んでいきたい思いです。

主に在りて。

長尾 基詩

『道』2024（年刊・第49号）

発行日 2024年11月 1日
発行者 西南学院大学神学部学生会
編集・製作 株式会社 工房ヒラム